

かゑらじと かねて思へハ 梓弓
なき数に入る 名をぞとどむる
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第73号

平成30年8月7日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

頼山陽、日本外史で正行の「正四位下」記す 楠氏の大節は山河と並び存し、と称赞

日本外史は名分論の武士歴史書

7月の例会は「頼山陽と正行」を取り上げた。
竹原頼山陽顕彰会発行の「頼山陽」は、冒頭、「幕末から戦時中までのベストセラー『日本外史』の著者「頼山陽」は江戸後期の歴史家、書家、詩人である。」と紹介する。

扇谷は、かつて長尾剛著「日本外史―幕末のベストセラーを『超』現代語訳で読む」を読んだが、名分論に貫かれた武士の歴史書で、平氏から徳川氏に至る間の武家13氏を尊王論の立場からめった切りにする痛快な論調で綴られていた。

しかし、今回、頼山陽を取り上げたことで、長尾剛著作本の底本となった岩波文庫「日本外史」（上・中・下巻）を入手し、同書第二部『新田氏』前期「楠氏」を読むことで新たな発見があった。

頼山陽は、楠氏の事績をしっかりと論じており、その中で、正行が正四位下に叙され、検非違使・左衛門尉に任じ、河内の守を兼務した事を書いている。

竹原頼山陽顕彰会発行「頼山陽」によると、寛政12年1800、頼山陽20歳のとき脱藩するが、探索の上連れ戻され邸内の座敷牢に監禁をされた。3年後監禁が解かれた後、広島で「仁室」で謹慎し、この時、日本外史の初稿に着手した、とある。

続けて、何度も推敲を重ね、文政9年1826、山陽47歳にしてようやく完成をする。この日本外史は、山陽没後数年、天保7、8年ごろはじめて版本となり、筆写の苦痛を感じていた多くの人から争って求められるという盛況を呈し、明治32年までに14版も重ね、多い年には1万部以上、平均5、6千部を売り続けたといい、空前のベストセラー・ロングセラーといえる、と結んでいる。

渡辺橋～袖を断って首をつつみ

日本外史巻の五、新田氏前記楠氏の楠正行に関する件を

見てみよう。

正行に直接触れる件として、「吉野の行宮」「正行の北撃」「四條畷の戦い」がある。

●日本外史

〔吉野の行宮〕

～正四位下について～

帝、正成の王事に死せしを思ひ、正三位左近衛中将を追贈し、正行を正四位下に叙して、帯刀となし、遂に父の官を襲（つ）ぎ、検非違使・左衛門尉に任じ、河内の守を兼ねしむ。

〔正行の北撃〕

～渡辺橋の美談について～

頼氏の軍乱れ走り、渡部を過ぎて、溺るる者無数なり。京畿（けいき）震駭（しんがい）す。正行、溺卒五百人を援（すく）ひ、衣甲を与へ、礼してこれを遣（や）る。留まり仕えんと願ふ者多し。

〔四條畷の戦い〕

～偽首の件について～

「嗚呼、汝も亦た無双の国賊なり」と。己（すで）にして曰く、「その勇は嘉（よみ）すべきなり」と。自ら袖を断って首（こうべ）をつつみ、隴上（ろうじょう）に置き、復た進んで師直を索（もと）む。

〔楠氏論贊〕

楠氏あらずんば、三器ありと雖も、将（は）た安（い）ずくに託して、以って四方の望みを繋がんや。

…而してその大節は毅然として山河と並び存し、以って世道人心を万古の下に維持するに足る。これを姦雄迭（たが）いに起こり、僅かに数百年に伝ふる者に比すれば、その得失果たして如何ぞや。

足利氏、源氏より罪が重い

次に、足利氏論贊を見てみよう。

長尾剛曰く、「足利氏は国を混乱させた大義なき支配者」と一刀両断、そして、山陽は、「彼ら（足利市）は15代の



